

『枕草子』第一段の国語学的解釈

潜在する論理の再構築

藤原浩史

はじめに

『枕草子』第一段は、平安文学屈指の名文と評価され、中学校の教科書にも採用されているが、その解釈は十分とは言えない。例えば、冒頭部は次のように現代語訳される。¹⁾

春は明け方。しだいに白くなってゆく山ぎわが、少し光を増して、紫がかった雲が細く柵引いている(のは趣がある)。

夏は夜。月の頃は言うまでもない(ことで)、やみ夜でもやはり、蛩が多く飛びかっている(のは趣がある)。また、ただ一つ二つなど、ほのかに光って行くのも趣がある。雨などが降るのも趣がある。

これを普通に読むと、異様に切れ味の悪い文章と言わざるをえない。もっとも、それは省略されていると思われる語句を()として補ったためではある。ならば()部分を抜いて逐語訳的に読んでみると、今度は論述スタイルの定まらない文章となる。どちらにしる悪文である。

省略語句を補充するとまずくなるのは、文の中で省略箇所を認定、ま

たは、補充すべき情報の認定に誤りがあることを意味する。また、逐語訳すると文章として一貫しなくなるのは、文と文の関係を正しく捉えていないことを意味する。平安時代の和文語のスタイルでは、言語情報が完全な形態で文字化されるとは限らない。情報の再構成に必須でない部分は記録されない方が普通である。ただし、それは記録された情報から連鎖的に再構成されるはずである。また、和文語では、文と文をつないで論理関係を表示する、接続詞・接続助詞・指示語・形式名詞といった類が、現代語のように充実していない。しかし、平安時代に論理がなかったわけではなく、それを明示的に表示する手段に乏しいだけのことである。明示されていないからといって、それを存在しないものとして逐語訳すると、内在する論理は消去されてしまう。つまり、われわれは、清少納言が意図し、言語化・文字化した情報を、正しく再構成できていない恐れがある。²⁾

この第一段は、語彙的また文法的な問題点が数多くある部分である。それを一つ一つクリアしなければ文章の価値が明かにならない点、国語学の対象として興味深い。本稿は、各文の意味、文と文のつながりを分

析し、この章段に本来記録されたと考えられる情報の再構成を試みるものである。右訳文に見られる通り、われわれ現代人にとって十分な情報が記録されていないことはすでに明らかであるが、清少納言と同時代の読者に対しては、必要な情報はすべて与えられているはずである。テキストの文字列を無駄なく言語化し、言語形式の意味するところを、平安貴族の常識に照らして再構築すれば、われわれにも彼女の意図するところを共有することは可能であると考える。

原則として、次の作業手順をとる。平安時代語で書かれた文章を、現代人が理解するためのごく機械的な方法である。⁽³⁾

この文章を前から後へ順番に読む。

一つ一つの文を主・述の呼応した形に復元する。

省略された情報は、前文脈から補充する。

前文脈から補充できない場合は、記録する価値のない自明の事柄と認め、平安貴族の生活・文化の一般常識に照らして補充する。

言語（語彙・文法）の意味は『枕草子』内の用例に照らして説明する。

本文

解釈作業に先だつて、対象とする文字列の確定が必要であるが、ここでは三巻本系の本文を採用する。単語数が少なく、もつとも簡略な構成であり、後世の他者による補充が少なく原型により近いと判断した。勿論、作品成立後省略を受た可能性はある。ただし、複雑な情報体を簡略化することは容易であり、またその価値もあろうが、この章段はもとより短く、内容は複雑ではない。単純な情報体をさらに簡略化するのは難

しい上に、読解・鑑賞に資する価値がほとんどない。前者と仮定する方が蓋然性が高い。具体的には、日本古典文学大系の本文を解釈作業の対象として採用する。

なお、文字列を言語として理解するためには、「文」という単位、「単語（文節）」という単位にそれを分かち必要がある。この点が諸家の論の分かれるところであるが、ここでは次のように言語化した。文単位（ ）で分かち、各文内部は文節で分かち書き表示する。仮名書き・歴史的仮名遣いによって表示する。

【第一連】

はるは あげぼの。

やうやう しろく なりゆく。

やまぎは すこし あかりて、むらさきたちたる くもの ほそく

たなびきたる。

【第二連】

なつは よる。

つきの ころは さらなり。

やみも なほ。

ほたるの おほく とびちがひたる。

また、ただ ひとつ・ふたつなど、ほのかに うちひかりて ゆく

も をかし。

あめなど ふるも をかし。

【第三連】

あきは ゆぶぐれ。

ゆふひの さして、やまのは いと ちかう なりたるに、

からすの「ねごころへ ゆく」とて、みつよつ・ふたつみつなど、とびいそぐさへ、あはれなり。
 まいて、かりなどの つらねたるが いと ちひさく みゆるは、いと をかし。
 ひ ிரいはてて、かぜの おと・むしの ねなど、はた いふべきに あらず。

【第四連】

ふゆは つとめて。
 ゆきの ふりたるは、いふべきにも あらず。
 しもの いと しろきも。
 また、さらでも、いとさむきに、ひなど いそぎおこして すみ もてわたるも、いと つきつきし。
 ひるに なりて、ぬるく ゆるびもていけば、
 ひをけの ひも しろき はひがちに なりて わろし。

主たる変更点は、通常一文とされる第一連 を二文に分割したこと、同じく一文とされる第二連 を三文に分割したことである。文の単位をもつとも短くとらえる方法を採用しているのであるが、一文内で意味の重複・不整合を生じないようにするために、このように切ることで、むしろ全体的に意味が通ると判断した結果である。その成否を含め、各文の分析・解釈を以下行なう。

解釈にあたっては、各文の文法的な解析を主とするが、文意の再構成の根拠となる単語の意味分析と、解析の結果得られた現代語訳は次のように、記号で指示する。

… 語釈

… 現代語訳 補足部分は（ ）で表示した。

単語の語形認定については、本稿では問題としないので、以下、本文・例文は、漢字仮名まじりで表記する。用例の引用は、日本古典文学大系本文によるが、句読点・表記は改めた点がある。また、出典は章段番号で表示するが、これは大系本によっている。

なお、各連の解釈の結論として、を【現代語訳】にまとめた。これに、分析過程で得られた情報を折りこんで【論説としての解釈】として示した。その意図するところを【解説】として説明する。

解釈

一、春はあけぼの 論説として

一、文章構成

春はあけぼの。

やうやう白くなり行く。

山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

第一連の本文理解は通例と異なるので、右のように文を短く切る理由を論じておく。まず、文と文を連続して「やうやう白くなり行く」山ぎは、少しあかりて」とすると、「白くなって行く」空の色が「少し明るくなる」意味の文と理解される。あまりにも当然すぎる一文ではあるが、連体修飾句と述語の意味が重複しており、むしろ連体修飾句がない方がましである。は独立した文として意味を完結できるので、これを「山ぎは」の連体修飾句ではないと理解することで、この問題は解決できる。

この章段の末尾の文は「細くたなびきたる。」という連体止めである。

も同様の連体止めと認めると、主題提示につづいて物・事を列挙して行く『枕草子』の類聚的章段として、「ごく自然なスタイルとなる。

つつくしきもの。瓜にかきたるちこの顔。雀の子の、ねず鳴きするにをどり来る。一二三つばかりなるちこの、いそぎてはひ来る道に、いとちひさき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとつつくし。(一五一段)

ただし、第一段は単なる羅列ではなく、各文が意味的な連鎖をもつので、これと同一視はできない。

一・二 文の解析

春はあけぼの。

「春は、あけぼの、をかし」という文の述語「をかし」の省略と説明されることが多い。しかし、省略される「をかし」が登場するのは、第二連末尾 に至つてのことである。そこまで読まなければ、冒頭に省かれていることがわからないのは、文章として異常である。「省略」と言うのは、書かなくてもわかる事柄を敢えて書かないものである。もしも、冒頭文から省略を行なつて読者が理解できるのであれば、後の「は」ほのかにうち光りて行くも。」「雨など降るも。」「をかし」を省略できたはずである。文の解釈に述語の省略を設定するのは適切ではない。⁴⁾

文の成分は主語と述語からなるが、「春は」、「夏は」、「秋は」、「冬は」は確実に主語である。残る部分は、原則的に述語であるから、これらは、名詞を述語とする文と認定される。主語となつているのは文の主題である。⁵⁾ 現代日本語でも、「ぼくは、ウナギだ」のように、構

造的に全く同じ文を作ることができる。この文は「自分は、実は人間ではなくウナギなのだ」と告白しているわけではなく(そういう場合に使うてもよいが、まずありえない)、例えば、食堂で注文をしている時に、複数の客の中で「自分」の注文を、お品書きのたくさん品物の中から「ウナギ」と指定するものである。このタイプの名詞述語文は、複数のモノの中から特定のモノを指定する「卓立」(取りたて)の機能を有する。つまり、は「あるものを切り捨てた」省略によって成り立つ文ではなく、「いろいろなものの中から一つを取り上げる」卓立によって成り立つ文である。ただし、このタイプの文は、文脈に依存して文意が確定する。ウナギ文でも、文意が「ぼく」の注文なのか、好物なのか、食べられないものか、自己紹介なのかは、文脈によって確定される。文も同様である。

この段において、なぜ、少納言は季節毎に時間・光景を選んでいるのだろうか。この文章が書かれた目的や、読み手の知識を考慮しておかなければならない。各連の主題「春・夏・秋・冬」は「季節」である。直接的には、清少納言もわれわれも日本の四季の移り変わりを共有している。だから、この文章は四季の移り変わりの「趣」を描いたものと理解することもできる。しかし、清少納言がもつていて、われわれがもつていない、つまり共有されていない文化があったとしたら、それでは不十分である。平安貴族にとつて「春・夏・秋・冬」は、詩集・歌集の部立てでもある。それは季節の美について、趣向と技術を競う、芸術のジャンルである。すなわち、季節の風物について語ることは、春の美・夏の美はどこにあり、何であるか、と論ずるのが主たる目的と想定できる。読者には、作者と同じような教養をもつ宮廷人が想定されているはずである。従つて、この段は「芸術としての四季の美」について、その清少納

言的見解を述べることを目的とする。「心に浮かぶ季節の風物」をほんやり想起している随想ではなく、季節の美を論ずる論説である。だから、さまざまなものから、特定のものを指定するタイプの文を選択したとするならば、言語形式と著者の意図が整合する。

なお、この名詞述語文末に助動詞「なり」を採用していないこと、また終助詞の類を付さないことから、自分の判断をあつかましく読者に披瀝しようとしたり、読者の同意要求や情報提示の態度を表明しない点も注目できる。きわめて淡々と自分の考えを呈示しているのである。この文の理解は次のようになる。文末は現代語として態度表明の二ニュートラルな「である」を仮に補う。

(季節のうちで、他でもなく)「春」に関して言うと、(勿論、いろいろと素敵なもの・素敵なとき・素敵な場面がある。しかし、一つ選ぶのなら)あけぼの(である)。

やうやう白くなり行く。

これは体言相当句であり、文の主語が述語のどちらかにあたる。主語とすると、述語の省略があり、それは後出の「をかし」ということとなる。前項の省略の妥当性に従えば、この案は否定される。これを述語と認定すると、主語の方が省略されている。ただし、夜から朝にかけて「白くなり行く」「ことが出来る主体は限定されている。」「空」であることが自明であるがゆえに、省略されたものと判断できる。⁶⁾

なお、用言連体形を述語とする文は、現代語では「〜の」「〜とき」「〜さま」など、準体助詞・形式名詞をとる文に相当する。この体言相当句を「空が(やうやう白くなり行く)とき・である(「と理解する」と、さらにこれを述語として主題が立ちうる。それは前文を参照して、述語

「あけぼの」と断定できる。すなわち、前文でとりたてた「あけぼの」の時間帯・風景に、さらに限定をくわえる文となる。

やうやう…時間の経過を説明する副詞。この箇所は、一般に「だんだんと白くなってゆく」のように、変化の途中を描写したものと考えられている。『枕草子』中の類例としては、次の がある。

うへなる人々のかぎりは出であ、下りなどして遊ぶに、やうやう明けもてゆく。(七八段)

これは「人々が遊んでいるうちに、次第に夜があけてゆく」と解釈される。しかし、「しだいに・だんだんと」と訳せるものは、このように文脈上基準となる時間が限定され、述語が「もていく」など段階的な変化である場合に限定される。

動作を表現するタイプの動詞では、これとは異なる。その動作がはじまるまでに時間がかった(やうと、ようやく)ことを表示する。

略「と、ただ責めに責め申し、うらみきこえて、わらひ給ふに、やうやう仰せられ出でて、「使にいきける鬼童は、臺盤所の刀自といふ者のもとなりけるを、略」など仰せらるれば、(一三八段)

では「話し出す」までに結構間があり、色々あったことを指す。また、変化を表現する動詞の場合は、のように結果の発生までに時間がかかっていることを表示する。

二月午の日の曉にいそぎしかど、坂のなからばかりあゆみしかば、巳の時ばかりになりけり。やうやう暑くさへなりて、まことにわびしくて、「など、かからでよき日もあらんものを、なにしに詣でつらん」とまで、涙もおちてやすみ困するに。(一五八段)

これは「暑くなる」途中を述べるものではなく、それを含んでそうなるまでに時間がかかったことを表現するものである。夜明け前から歩いたけれども、「巳の時」昼前になってしまった、歩いて苦しい上に、とうとう暑くさえなつて、とてもこたえる、という文脈である。

要するに、一般に「やうやう」は事態が生ずるまでの時間経過をとりたてており、「しだいに・だんだんと」と訳せるものは例外的なのである。も「ようやく」「いつの間にか」と訳しても文意は破綻しない。文においては、「遊ぶに」のような時間の限定がなく、「やうやう」がとりたてるのは「白くなる」変化の発生を認識するに至るまでの時間である。すなわち、未明から空が白みはじめるまでの時間の経過を表現しており、空は未だ暗いけれども、これから明けようとする光がわずかに感じられるところをとらえ、そしてその後より白くなることを予期した一文と解釈できる。この空を見る主体は、夜明けをずっと待つており、空の色の変化を意識していたことが、この文の前提として暗示される。

白く…「著し」の意とする説明もある。⁽⁷⁾ その場合、「(不鮮明な)山際の空がはつきりしてゆく」意味となる。ただし、空の色の説明でも不整合が生ずるわけではない。また、後続の「雪」「灰」に「しろき」「しろく」とあるので、それと同義と認めて問題はない。ただし、空が明るくなるのは「あかく」としてもいいはずだが、それは選択されない。色彩の「赤」を喚起しないためか、ここで指定する空の明度そのものが低いためか、確定できないが、夜から朝にかわるうとする瞬間の説明になる。

なりゆく…「ゆく」は、ある基準時から見て、その後状態変化の度合が増してゆくことを述べる。すなわち、一方向の連続的变化を表現

する。「白くなり行く」の直接の変化主体は「空」ではあるが、白くなる変化が生ずるのであるから、それ以前の、「黒い空・暗い空」と限定される。なお、類似する表現として、「もて行く」がある。これは「昼になりて、ぬるくゆるびもていけば」のように、段階的な変化をとりたてる表現である。ここでは、敢えてそれを採用していない。

(あけぼのと言つても、それは暗い空が)ようやく白くなってゆく(ときである)

山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

「山ぎは少しあかりて」と「紫だちたる雲の細くたなびきたる」の二節からなり、それぞれ動詞の主格が表示してある。ただし、二節全体が体言相当句を形成しており、名詞述語文の主語(主題)か述語のどちらかにあたる。省略の原則に従つて、主題は前文脈を受け継いでおり、これは述語部分に相当すると理解できる。具体的には、文が主題にあたる。表示されている体言相当句内の「山ぎは」は、に潜在する「空」の一部にあたり、前文で述べた内容に、さらに説明を加える文となっている。さらに「雲」はそこに浮かんでいる存在であり、は連鎖的に、春の美について焦点を絞り込む論理を構成することがわかる。

なお、この文は、次のように二文に分かつ可能性も指摘されている。⁽⁸⁾

a. 山ぎは少しあかりて、紫だちたる。

b. 雲の細くたなびきたる。

この場合、雲ではなく空の方が紫色を帯びていることになる。しかし、次のように、雲が紫であるとして問題はない。また、のように類似する文例もある。

雲は白き。むらさき。黒きもをかし。(二三五段)

日は入り日。入りはてぬる山の端に、光なほとまりて赤う見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり。(二五二段)

内容的に、二文に分かつ必然性はない。また、文脈の流れを確認すると、aの方は「それは、山際が少し明るくなって紫がかつているところである」とに適合する。しかし、b「雲が細く縋引いているところである」は、前文脈に論理的につながらない。いわば蛇足の文となる。やはり、二文に分かつ必然性はなく、二節からなる一文と認められる。

なお、赤みを抑制した空に、縋雲が縋引く光景を卓立するのには意味がある。朝焼けせずに、高い筋雲が出ていると、その日は一般に晴模様である。その想起を指定する情景描写と理解する。

山ぎは…平地の山との境界、空の山との境界のどちらも指示しつる。前文で主題が「空」であることが暗示されるので、後者である。

月は有明の、東の山ぎはにほそくて出づるほど、いとあはれなり。(二五三段)

あかる…光量が増すことを意味する。ただし、現象として光の増加は一つではない。

A 闇に光が入る場合。(O) (+)

B 光がある状態にさらに光が増す場合。(+) (+)

この場面は、文の解釈に従えば、光がない状態から光がある状態に変化するAタイプの可能性が高い。わざわざ副詞「少し」が付加されているところに着眼すると、「闇にわずかに光が感じられる」微妙な局面を表現したものである。を「だんだん空が白くなってゆく」「すでに空が白くなっている」と解釈すると、Bタイプとなるが、そ

の場合には「少し」と程度の少なさをわざわざ説明する価値がない。

結果「あかる」を色彩の変化「赤くなる」と考えることになるが、『枕草子』中ではそれは「あかむ」「あかく・なる」と表現されている。

かへでの木のささやかなるに、もえいでたる葉末のあかみて、おなじかたにひろりたる、葉のさま、花も、いと物はかなげに、(四〇段)

七八尺の髪のおかくなりたる。(二六三段)

単語として同義ということはありません。「あかる」は光量の変化をとらえるものであろう。

紫だちたる…もともとの色合いとは別に、紫色を帯びている様子。「だつ」は接尾辞であるが、「見かけが」の様子を帯びていることを表す。

「ほそやかなる男の、すそ濃だちたる袴、二藍かなにぞ、髪はいかにもいかに、搔練・山吹など着たるが、略。(二〇三段)

「すべて、もの聞えじ。方人とたのみきこゆれば、人のいひふるしたるさまにとりなし給ふなめり」など、いみじうまめだちて怨じ給ふを、(一六一一段)

は「袴」が実際にどうかはともかく、「すそ濃」に見えていること。は文句を言う顔が「まめ(真剣)」に見えることであり、性格・人格がそうであること(これは「まめなり」となる)を意味しない。あるものの表面に、ある状態が生ずることである。類義の「ばむ」は、のようにものの表面だけでなく、内部にまである状態が生ずることを意味する。また「めく」は全体として、ある物の状態を具えることを意味する。

單は白き。略黄ばみたる單など着たる人は、いみじう心づ

きなし。(二八三段)

つとめて、見れば、屋のさまいとひらにみじかく、瓦ぶきにて、
唐めき、さまことなり。(一六一段)

「紫だちたる雲」の場合は、本来の色は別にして、その表面に紫色の色彩が生じている状態であり、光をつけて紫色を映している雲である。全部が紫でも、本来的に紫でもない。

たなびきたる…横方向に伸びている様子。ここでは「細く」とあるので、すじ雲である。他が明るくなる前に光を受けているので、低い層雲ではなく、高い空に出る巻雲(縞雲)である。高気圧の時に出るの概ね天気がよくなる。この夜明けの後、おだやかに晴れた春の一日が訪れることが予期される。

(その空は(山際)のところ)が少し明るくなって、(まだ暗い空に)紫色を映した雲が細く棚引いている(光景である)。

一三 解釈

以上を総合して、第一連の意味を理解しておこう。

【現代語訳】

春はあけぼの(である)。(それは暗い空が)ようやく白くなってゆく(ときである)。(その空は東の(山際)のところ)が少し明るくなつて、(そこに)紫色を帯びた雲が細く棚引いている(光景である)。

清少納言の美意識として、いかにも「春」であり他の季節にはない美を、この瞬間であると論ずる。この三文の文・文章の構造の分析から読み取れた情報を補足して解釈すると、次のようになる。

【論説としての解釈】

四季のうち他の季節ではなく、「春」に関して言えば、いろいろと素

敵なもの・素敵なときがあるが、一つ指定するならば「あけぼの」である。「あけぼの」と言っても、それは夜の暗い空がようやく白くなってゆくときである。まだ空は暗いけれども、東の山際のところだけほんの少し光を含んでいて、紫色を帯びた雲が細く棚引いている光景である。それを見ると、きつとうららかな春の日は訪れるとわかる。春の日は、言うまでもなく絶対的に美しいが、それよりも、そのような素敵な一日が訪れることを予感させるあけぼのに、美があると思つ。

【解説】

ここでは、春のあけぼのの趣を説明しているのではなく、また心に残る情景描写を行なっているのではない。春の日(朝以降)は勿論美であると考えられるが、そのものではなく、それを予感させるポイントに焦点を絞つた点が清少納言の意匠である。自然が作り出す季節の美を絶対的に美しいものとして提示しつつ、そこに「予感・期待感」という人為的な要素が関与することを示唆する。これは「随想」というより「論説」と評価した方が適切であろう。とするならば、清少納言が第一連において提示するメッセージは、「自分は、自然の美に人為を関与させて美とする」ということ、あるいは「自然の美は、それ自体が美か、人間が美とするのか」という問いかもしれない。

二 夏は夜 隠れた主題・隠れた論理

二一 文章の構成

第一連は、あけぼのの一瞬に焦点をあてるように構成されていたが、第二連は見かけ上、夏の夜の風物が並列されている。光があつても闇でもよく、晴でも雨でもよい、と読むのは、これをテーマをもたない投げ

遣りな文章と見るに等しい。しかし、細かい点に注目するならば、やはり論理が構成されており、一貫した美意識が認められる。

文章の構成を確認しておく。次の「」を一文とする本文が多いが、ここでは三文に分かった。一文とすると「月の頃は一層のことで」蛩がたくさんとびちがつているのがよい」のように、月夜の蛩をめぐる異様な文章が出来するからである。

月の頃は、さらなり。

闇も、なほ。

蛩の多く飛びちがひたる。

「さらなり」「は終止形なので、単純に文の終りと認める。と」の断続、

との断続は、文の構造を検討する必要があるので、後述する。また、

文「雨など降るも」に添加された副助詞「など」の意味は分析の必要がある。

二. 二. 文の解析

月の頃は、さらなり。

闇も、なほ。

文の述語は「さらなり」であるが、直接の主語が明示されていない。「さらなり」「は状態の程度を説明するので、主語に何らかの状態を要求する。それが何か前文脈にはないので、「月の頃は、×デアルコトガ一層である」とするよりない。

文の「闇も」は、の主題「月の頃は」と対をなす。「なほ」は副詞であるが、それがかかる述語の本体は省略されている。「も」とあるように、前文に依存した文なので述語は「に共通する。「さらなり」とまでは言えないけれども、同じ性質 ×デアルコト」を共有する。この

× は「夏は夜」と指定する根拠を形成するものでなければならぬ。

さらなり…ある状態の程度が、他にくらべて高いことを表現する。

草の花はなでしこ。唐のはさらなり、大和のもいとめでたし。

(六七段)

とあるように、唐の撫子も、大和の撫子も、ともに「めでたし」と評価されるが、唐のものはその程度が「より一層」と評価される。二次的に「言うまでもない」と話者・著者の心的態度も表現する。

桃の花のいまさきはじむる。柳などをかじきこそさらなれ、それもまだまゆにこもりたるはをかし。ひろこりたるはうたてぞみゆる。(四段)

の例に顕在化しているように、「さらなり」の直接的な主語は何かの状態「」であることである。

なほ…前提となることごらをつけつぐ情報であることを導く副詞。

ではA「あかつきに雨がふっている」 B「つとめて雨がやむ」 C

「しかし、曇っていて降りそう」と、CがAをつけつぐ内容であることを表示する。

九月九日は、あかつきがたより雨すこしふりて、菊の露もこちたく、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされて、つとめてはやみにたれど、なほくもりて、ややもせばふりおちぬべくみえたるもをかし。(一〇段)

「月の頃」を「さらなり」とプラス評価したので、それに対立するの「闇」はマイナス評価が予期される。しかし、これも「月の頃」と同じプラス評価であることを「なほ」で示す。

月の頃は、×デアルコトガ 一層である。

闇(の頃)も、やっぱり X デアル。

蛍の多く飛びちがひたる。

また、ただ一つ・二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。

文は構造的には 文「雲の細くたなびきたる。」と同じ。体言相当句として文の述語となる。主題は直前の 文を受けて「闇が X デアルこと」。そして、それは「蛍がたくさん飛び違っている光景である」と指定する。

文は と並列される文であるが、「また」で接続する。前文で多くの蛍を評価した流れから言えば、少数の蛍は魅力が低いはずであるが、やはり魅力があることを述べる。ただし、その場合、光は「ほのかに」であり、「光る」ではなく「うち光る」「すなわち瞬間性と程度の軽さを帯びた」「ちよっとだけ光る」「点がポイントとなる。「月の光」、多くの蛍の光」と青白い光が、強目に輝くことを評価しているのだが、ここで清少納言はかすかな青白い光でも心が引かれると述べる。光に感じるものは、量的なものではなく、質的なものであることを導く。をかし…対象に、自分が魅力を感じる属性があることを表現する。次の例のように観察者が美点を能動的に見出したり、自分の興味がそえられる場合に用いる。

梨の花、よにすさまじきものにして、ちかつもてなさず、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔などを見ては、たとひにいふも、げに、葉の色よりはじめて、あいなくみゆるを、もろこしには限りなきものにて、ふみにも作る、なほきりともやうあらんと、せめて見れば、花びらのほしに、をかしき匂ひこそ、心もとなつきたためれ。(三七段)

この連においては、月の光や多数の蛍は、もとより美しいので、わざわざ「をかし」と言う必要はない。他人がそうは思わないかもしれない、少しの蛍がちよっとだけ光る光景や、珍しかろうはずもない「雨」にも、彼女は心を引かれるのである。

X デアルノハ 蛍がたくさん飛びかっている(ところである)。また、(たくさんでなく)ただ一つ・二つなど(少しの蛍が)、ほのかにちよっとだけ光って(飛んで)行くのも、魅力を感じる。

雨など降るも、をかし。

単に「雨」がいいのであれば副助詞「など」は不要である。「〜など」とする場合、それと属性を同じくする集合が意味される。次の例では「手長」「や」「足長」と属性を同じくする「いろいろな怪物」を指示する。清涼殿の丑寅のすみの、北のへだてなる御障子は、荒海の繪、生きたる物どものおそろしげなる、手長・足長などをぞかきたる、上の御局の戸をおしあげたれば、つねに目にみゆるを、にくみなどしてわらふ。(二三段)

しかし、「雨」と属性を同じくするものとは何か。夏に「降る」ものと言えば「雪」や「霰」であるはずはないので、具体的な属性を共有する同類はない。すると、その属性は人間が「夏の夜の雨」に感じる印象・感覚であろう。それは「月」「蛍」といった特別に美しい景物に対するものに対立する評価、すなわち「平凡さ・日常性」である。そして、「も」とあるので、前文と同じ理由で、魅力を感じるのである。

(そのような特別なものでなくても)雨のようにありふれたものでも、X デアルカラ 魅力を感じる。

二・三 文章の目的

「夏は夜」と判断されるのは何故か。また、「月の光」「蛍の光」が夏の美になるのは何故だろう。「蛍」は夏の風物だが、「月」ならば秋でもよさそうである。文脈に明示されないので、×「テアルコト」としたが、答を出しておきたい。『枕草子』では、「月」に関しては、次の一文がある。

七月ばかりいみじうあつければ、よろづの所あけながら夜もあかすに、月の頃は寝おどろきて見いだすに、いとをかし。やみもまたをかし。(三六段)

少納言はここで月をめでているが、その契機となるのが「いみじうあつければ」である。ひどく暑い時に月を見ると、「をかし」と感じるのである。暑くて眠れない時、起き出して月を見ると魅力的なのは、暑さによる不快が解消されると感じるからである。「月」は少納言に涼やかさもたらす。

この第二連は、これより暑い夏をとりあげている。夏は基本的に暑くて不快である。「夏は夜」と限定するのは、夜だけは暑さから解放されるからである。そして、青白い「月の光」がもたらす感覚と、同じく青白い「蛍の光」がもたらす感覚は「涼感」である。これが省略されている×に相当する。著者を含んで平安貴族の生活感覚に基づくことがらであるから、自明のこととして省略されていても、直接共感できる事項であろう。

「このように考えると、「雨など」に感じる魅力もやはり「涼感」である。それをもたらすものであれば平凡なものでもよく、特別な風物である必要はないと示唆するのである。この連では、夏は、日中の不愉快さがあるがゆえに、対比的に、夜の涼感が際立つことを述べ、人に涼感

をもたらし、快へ誘う物を美としている。

二・四 解釈

【現代語訳】

夏は夜(である)。(その頃は、(それが)一層である。(月のない)闇の夜)も、やっぱり(そうである)。(それは)蛍がたくさん飛びかっている(ところである)。また、(そのように)たくさんでなく(ただ一つ・二つなど)(少しの蛍が)、ほのかにちよつとだけ光って(飛んで)行くのも、魅力を感じる。(ありふれた)雨などが降ったりするもの(涼感があつて)魅力を感じる。

【論説としての解釈】

「夏」に関して言えば、とにかく日中は暑くて不快である。だから、いいのは「夜」である。ほとんどが不快なだけに、涼感が際立つて感じられる。月が出ている夜ならば、青白い光によって、涼感が一層まです。しかし、闇夜でもやっぱり同様である。涼感を感じるのは、蛍がたくさん飛び交っている光景である。また、たった一つ・二つなど、蛍が少しだけ、しかもほのかにちよつとだけ光って、飛んで行くのも、魅力を感じる。たくさんでなくても涼感を感じられる。月や蛍といった特別な風物でなく、ごくありふれた、雨が降るようなことでも、涼感を添えるものとして、同じく魅力的である。不快の対極にある快に導く力をもつもの、それが「夏の美」だと思つう。

【解説】

春や秋は快適な季節なので、それ自体が美であるものをとりあげるのだが、この章段では「不快」の対極にあるものとしての「快」をとりあげる。夏に夜を指定した根拠は生活感覚に基づく、「非・不快」にあ

るが、「月」「螢」「雨」といった風物は、それを「反・不快」すなわち「快」に導く。つまり、人を「快」に導く力をもつものとして「美」と判断する。ここでは、季節の自然美のありようは相対的であり、それを美とするのは人為的な要素であることを暗示する。

この検証として、少納言は、夏の美第一の「月」を消し、「闇」を立てる。そこには「螢」があるので、量を極小化する。それでも美なので、特別な風物を消し、四季を問わぬ「雨」をもちこんでも自分の感覚には「美」を感じる。つまり、「美」の成立に、自然より人為の優先を論ずるのである。

三、秋は夕暮れ 情報操作と論述態度

三、一、文の解析

夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、

末尾の格助詞「に」は時間表示なので、この一節は「〜するとき」と時間帯を述べるものである。「山の端いと近うなりたるに」では「山の端」が「なりたる」の主語である。「山の端」は「日没線」の意味で用いられているので、「日没線が近くなる時に」という意味と解釈する。上接する「夕日のさして」には到達点(→)の表示がない。これを、漠然と「日がさしている」様子にとらえようと、並列的に「夕日がさして、山の端が近くなる」となるが、「山の端」は可動物ではないので、それが「近くなる」ことはできない。その主体は「夕日」以外にはない。そのため、構文的には、前節と後節が継起的でなければ、文の意味が整合しない。到達点表示がない理由としては、自明のこととして省略されている可能性がある。この風景を観察している主体、言うまでもない存在である著者の視点が基準となる場合である。屋敷の中に低くなつた日

がさしこんでくる。そこで、夕日に目をやると、まさに日没直前で、山の端(日没線)がとても近くなっているところを目にする。単に「近うなる・に」ではなく、「近うなり・たる・に」と眼前の状態として記述されていることが、一つの根拠となるであろう。これによって、読者の視点を自分の視点に、そして実景として想起すべく、日没寸前の西の空へ誘つ。⁽¹²⁾

山の端…山の稜線部。次の例は、「日の入り」と、「日の出」の例。

日は入り日。入りはてめる山の端に、光なほとまりて赤う見ゆるに。(二五二段)

下に、「山の端明けしあしたより」と書かせ給へり。(二三八段)

では「明く」の主語となることに注意される。つまり、東西が山並みである地形においては、「山の端」は実質的に、日の出と、日の入りの基準ラインとなる。「日昇線(山の端)があける」が可能なので、「日没線(山の端)が近くなる」も可である。

さす…多義語であるが、ここでは光が入ってくる動きを示す。光を光源から到達点にいたる線状のものと認識する。

うへにさぶらふ御猫は 略、日のさし入りたるにねぶりてゐたるを、略 御簾のうちに入りぬ。(九段)

下簾もかけぬ車の、簾をいと高うあげたれば、奥までさし入るる月に、薄色・白き・紅梅など、七つ八つばかり着たるうへに、濃き衣のいとあざやかなる、つやなど月にはえて、をかしう見ゆる、略。(三〇二段)

(部屋の中に)夕日がさして(きて)、(外を見るとまさに)日没直前

で、

鳥の「寝所へ行く」として、三つ四つ・二つ三つなど、飛び急ぐさへあはれなり。

「とて」で導かれる「寝所へ行く」は「鳥」の鳴き声を読み解いたもの。「鳥の〜飛び急ぐ」が、「あはれなり」の主語となるが、注目点は「さへ」の添加である。鳥が飛ぶという、ありふれた光景さえ「あはれなり」すなわち、寂寥感を帯びて感動的と言つのであるから、「秋の夕暮れ」ということ自体が「論ずる余地なく美である」という前提がある。

あはれなり…対象が情意を動かす性質をもつことを表示する、評価の形容動詞。語幹となる「あはれ」は詠嘆の感動詞で、人間の情動を直接的に表す（波線部）。対象の評価としては、のように、事柄が「感動的」であることを表す。

白樫といふものは略、をかしきこと、めでたきことにとりいづべくもあらねど、いづくともなく雪のふりおきたるに見まがへられ、素盞鳴尊出雲の國におはしける御ことを思ひて、人丸がよみたる歌などを思ふに、いみじくあはれなり。（四〇段）
あはれ、昨日翁丸をいみじくも打ちしかな。死にけむこそあはれなれ。（九段）
はし舟とつけて、いみじく小さきに乗りに漕ぎありく、つとめてなどいとあはれなり。（三〇六段）

対象が有情物の場合、のように悲哀の感情を共有する意味「気の毒・かわいそう」となる。また、風景など無情物を対象とすると、のように哀感・寂寥感をともなった美を有することを表現する。

鳥が「寝所へ行く」と鳴きあいながら、（あちらに）三つ・四つ、（こちらに）二つ・三つと（小さなまとまりが空に点々と）（日没に間に合うよう）（飛んで急ぐ）（日常的でありふれた光景）さえ、感動的である。

まいて、雁などの連ねたるがいと小さく見ゆるは、いとをかし。

「雁など」とあるが、これは「雁」に代表される一般属性をもつものを示唆する。前文の「平凡な」鳥に対して、「季節の風物の典型」がその属性であろう。ここではいかに秋らしい風物に置き換えたため、副詞「まいて」で導かれる。夕暮れの空の光景として「夕日」に秋の代表「雁」をおく。当然それは一層すばらしいはずだが、ここでは「いと小さく」と限定する。つまり、目を凝らさなければ見えないような見え方にまで、それを矮小化しているのに、それでもとても魅力を感じると言つのである。

まいて…前件にくらべて、程度がはなだしい後件を導く副詞。

なに事をいひても、「そのことさせんとす」「いはんとす」「なにとせんとす」といふ」と「文字をつしなひて、ただ、いはむずる」「里へいでんずる」などいへば、やがていとわろし。まいて文にかいては言ふべきにもあらず。（一九五段）

右は、「〜んとす」を「〜んずる」と話すのはよくないと述べたものだが、それを文字に書いては他人が読み、記録として残るので、さらに言うまでもない、つまり、より悪いという。

まして（鳥の替りに、秋の定番である）雁などが（夕暮れ時に）列をなして（飛んで）いるのが、とても小さく見えるのは（目をこらさなければならぬとしても）とても魅力を感じる。

日入りはてて、風のおと・虫のねなど、はた言ふべきにあらず。

夕日と鳥、夕日と雁と、どちらも美的であった。この文ではそこから、夕日のない風景に転じる。夕日がなくなっても「風のおと・虫のねなど」秋の特別な風物がある。それを少納言は、「はた言ふべきにあらず」と評する。

おと・ね…「こゑ」とともに、音声であることは共通する。ただし「ね」は旋律をとめない、「こゑ」は言語（意味）をとめない。

はた…類義の「また」が前文脈と関連性をもって並列的に存在する事柄を導くのに対し、前文脈と関連性をもたない事柄であることを予告する。

夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、いひつづけたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、實のありさまこそ、いとくちをしけれ。などさはた生ひ出でけん。（六七段）

（故殿の法要が）果てて、酒飲み、詩誦などするに、頭の中将齊信の君の、「月秋と期して身いづくか」といふことをうちいだし給へりし、はたいみじうめでたし。（一三五段）

まへにゐたる人は心得てわらふを、「あなかま」とまねき制すれども、女はたしらず顔にて、おほどかにてゐ給へり。（二二段）

では花の美しさに対して実の不恰好を述べ、そして「どうしてそのように生まれたのだらう」と不審がる。花の方はさておいて、実の方について論ずるのに「はた」を用いる。では、故道隆の法要の後、齊信が詩（伊尹を偲ぶ文時の詩）を誦したことを「すこく、すばらしい」と絶賛するが、法要の件とは別にして述べる（そうしないと、さすがに不謹慎であろう）ことを「はた」で表示する。「はた」は、それ以前の文脈に表示される事態を容認しつつ、それとは別に存在する

ことがらを導く。では、周囲の人々が注意しているのに、それが自分に関わることに気がついていないことを「はたしらず顔」と表現する。文では「風の音」「虫の音」と秋の美を列挙するので、その美は当然と認める。しかし、それを賞賛する立場に立たず、別の視点から「言ふべきにあらず」と論ずるのである。

言ふ…ことばを表出する動作。清少納言自身の動作として記述される場合、自分のことばによる表現活動に及ぶ。

「言くはへよ、聞き知れとはあらず。ただ、人に語れとて聞かするぞ」とのたまひしなん、すこしくちをしきせうとおぼえに侍りしかども、本つけこころみるに、いふべきやうなし。（八二段）

右は、歌の本つけができないことを、「いふべきやうなし」とする。ここでは、季節の美について私見を披瀝しているので、論述・論評活動が「言ふ」の具体的内容となる。

べきにあらず…多くは係助詞「も」を介して「べきに・も・あらず」の形をとる。「するのにも不適當だ（だから、くない）」という態度を示す。

桐の木の花、むらさきに咲きたるはなほをかしきに、葉のひろこりさまぞ、うたてこちたけれど、こと木どもとひとしう言ふべきにもあらず。（二二七段）

「べきにあらず」と係助詞を介在させない場合も、同様に「不適當」であることを示すが、次のように、ほとんど「不可」に近い。

とり所なきもの。かたちにくさげに、心あしき人。みそひめのぬりたる。これいみじう、よろづの人のにくむなる物とて、いまとどむべきにあらず。（一四一段）

右は、容姿が悪い、性格が悪い……といった人々について、皆が嫌だといって、それを止めることはできない、という主旨である。「言ふべきにあらざ」の場合、ほぼ「言つのが不可である（言えない）」に相当する。清少納言はここで季節の美を彼女なりに論じているので、秋の美として当然のものであるから、「言ふ」すなわち「ここで、自分の論としてそれをとりあげる」のは不可と表明するのである。この表現自体に「言つまでもなく、すばらしい」というようなプラスの評価は内在しない。はむしろ逆順に「すばらしいのが当たり前なので、言つべきでない」という論理である。

日がすっかり入ってしまった、風の音・虫の音など（聞こえてくるのは、いかにも秋らしく美しいが、それ（を）、私がわざわざここで）言つことはできない。

三二 解釈

【現代語訳】

秋は夕暮れ。夕日がさして、山の端がとても近くなっているところに、鳥が「寝所へ行く」と鳴き合いながら、あちらに三つ・四つ、こちらに二つ・三つと、点々と飛んで急ぐのさえ、感動的である。まして、雁など秋の渡り鳥が列をなしているのが、とても小さく見えるのは（見えにくくても）とても魅力を感じる。日がすっかり入ってしまった、風の音や虫の声などが聞こえるのは、当然すばらしいが、私がわざわざここで（言つべきでない）。

【論説としての解釈】

秋と言えば夕暮れである。それは、論ずる余地なく美しい。夕日がさしてきて、西の空を見ると、もつすべ日没というときに、鳥が「寝所

へ行く」と互いに鳴き合いながら、あちらに三つ・四つ、こちらに二つ・三つと、点々と飛んで、日没に間に合うように急いでいる、といった、ありふれた光景さえ、寂寥感が十分感じられて感動的である。まして、鳥ではなくて、いかにも秋らしい雁などが、列をなして飛んで行くのが見えると、それがとても小さくて目を凝らさなければならなくても、まさに秋の美を表すものとして、心が引かれる。日がすっかり入ってしまった、夕暮れの風景から夕日がなくなっても、秋風の音が聞こえたり、虫の声が聞こえてくるなど、すばらしいのが当然であって、私の論として言つことはできない。

【解説】

「秋の夕暮れ」は絶対的な美であると清少納言は思っている。しかし、それをそのまま自分が説明する意味がないという自覚が表明されている。にも関わらず、論及せざるをえないくらい、それはすばらしい。そこで、少納言は夕暮れの景色に操作を施す。しかし、四季を問わない「鳥」を登場させて平凡化・日常化しても秋の美であり、「雁」を「いと小さく見ゆる」と矮小化しても美であり、最後に「夕日」そのものを取り去っても美である事を確認する。その結果、もはや論者の余地がないと評価し、秋の自然美は人為に優先して動かないことを示唆する。第二連では、自然に人為が優先することを示唆したが、第三連では相反する現象を潜在的に提示する。

四 冬はつとめて 論説の結び

四一 文章構成

この連は、主題をのぞく四文のうち、前二文が「言ふべきにもあらざ」を述語とする。風景描写としては内容に乏しい。また、独立した「冬の

「美」の論としても、内容に乏しい。この連は全体の末尾であり、全体の流れを受ける論説の結論として理解する必要がある。また、「美」をテーマとするこの文章において、末尾を「わろし」とする意義も問題である。

四、二文の解析

雪の降りたるは、言ふべきにもあらず。

「雪の降りたる」は体言相当句、「つとめて」の状況の一つとして「雪が降っているとき」を卓立する。冬の風物として「雪」はやはり定番なので、自分がそれを指摘することに関して、「言ふべきにもあらず」と評する。「も」が挿入されている分、より不適性がゆるやかな表現となる。

(冬)の早朝(雪が降っているときは)もとよりすばらしいので、私
がわびわび(こ)で言つべきことでもない。

霜のいとほきも。

「雪」と同じく「霜」について論ずる文。述語が省略されているが、前文の述語「言ふべきにもあらず」に同じ。

(同じく)霜がとても白いときも)もとよりすばらしいので、私
がわびわび(こ)で言つべきことでもない。

また、さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして炭もてわたるも、
いとつきつき。

問題は「さら・で・も」の「さり」の指示内容。前文脈の「雪が降っている」「霜が降りている」状況を指示するが、二つに共通する属性

「冬の風物の典型」⁽¹³⁾的狀態をさす。類義語「しかり」が直前の言語情報をそのまま受ける「その通り」であるのに対し、「さり」は言語情報そのものではなく、それによって代表される内容を指示する。前出の情報に対して「冬の風物として特別なもの」と評価しつつ、「そんなのでなくとも」つまり「普通の早朝でも」と後続の文脈を導く。

「いと寒き」は体言相当句、雪も霜もないごく普通だけれども「とても寒い早朝」の意味となる。「火など」は「火」に代表される暖房道具。「炭もてわたる」も体言相当句であるが、述語「いとつきつきし」の主題となる。

また：前出「はた」に対し、導かれる後件が前件と関連性をもつことを表示する。文では、雪や霜のような絶対的な存在ではないが、冬の美として同様に列挙できるものを導くことを表示する。

つきつきし：あるものの様子が、その場の雰囲気⁽¹⁴⁾に適合している状態を表現する。

主殿司こそ、なほをかききものはあれ。略。わかかたちよ
からんが、なりなどよくてあらんは、ましてよからんかし。すこ
し老いて、物の例知り、おもなきさまなるも、いとつきつきしく
めやすし。(四七段)

人の家につきつきききもの。肱折りたる廊。圓座。三尺の几帳。
おほきやかなる童女。よきはしたもの。略(二三五段)

では経験をつんだ女官の様子が主殿司のつとめにびつたりだと述べる。では「人の家」にあるとよいものを列挙する。ある物が何かに調和的であることを表す。ここでは、寒い朝と、急いで暖をとるための準備をしている人々の動きが、いかにも調和していると評価する。つまり、寒気と緊張感の調和である。

また、そんな（特別なものがあるとき）でなくても、とても寒い朝に、（人々が）火を急いでおこして、炭をもって（配って）まわるのも、冬の朝にとてもびつたりである。

昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

「ぬるくゆるびもていけば」は前文を受け、「（その）寒気がだんだんゆるんでゆくと」を意味する。火桶が灰がちになるのは、炭をつぐ必要がないからであり、もう早朝のように人々が立ち働いていないことを暗示する。これを「わろし」と評価するが、寒気自体は好ましいものではなく、暖かくなるのは悪いことではない。また、人々がのんびりするのにも悪いことではない。【第二連】の論理からすれば、人を「快」に導ぶくものと評価されるはずである。しかし、好ましくない寒気と、好まれるはずもない緊張感の両方がなくなった状態を見ると、それは美的でないことと断ずるのである。において、季節の美が自然と人間の双方の調和によって生まれることを、背理的に証明した文である。

もていく…状態の変化に接続する場合は、段階的な変化（だんだんとなる）の過程をとりたてる。

二十日の程に雨降れど、消ゆべきやうもなし。すこしたげぞ劣りもて行く。（八七段）

右例は、雪の山が雨でできえなかつたけれども、少し高さが減ってきているところを描写したもの。人間の動作の場合には、継続的な動作を順次実行してゆくことを表示する。

「いで、その昨日の巻敷」とて請ひ出でて、伏し拜みてあけたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと思ひてあけも

ていけば、法師のいみじげなる手にて、「歌略」と書いたり。（一三八段）

右は巻敷だと思つた紙包みを、順番にあげていくと、中から歌が出てきたもの。は前者のパターンで、主体は人ではなく、気温である。わろし…あることがらについて、負の評価をする形容詞。は檳榔毛の車はゆつくりとやるのがよく、そんな高級車を速く動かすのはよくないと判断する。では親しい関係なのに、かしまつた文章を送ることにについて、よくないと判断する。

檳榔毛はのどかにやりたる。いそぎたるはわるく見ゆ。（三一段）

文ことはなめき人こそいとにくけれ。世をなめに書き流したることばのにくきこそ。さるまじき人のもとに、あまりかしまりたるも、げにわるきことなり。（二六二段）

類義の「あし」も、負の評価をするが、「名対面の名乗りが悪い」、「体調が悪い」と、そのことがら自体の属性を判定する。

殿上の名対面こそなほをかしけれ。略。「名のりよし」、「あし」、「聞きにくし」などさだむるもをかし。（五六段）

胸つぶるるもの。競馬見る。元結よる。親などの「心地あし」とて、例ならぬけしきなる。（一五〇段）

「わるし」の方は、の車を急がせること自体は悪いことではなく、物のランクを考慮した場合に不適切さを感じるものである。また、の、かしまつたことば遣い自体は悪いものではなく、人間関係に合わせていないのが不適切なのである。では、に存在した美がもはやないことを「わるし」と評する。

昼になつて、だんだんぬるく空気がゆるんでいくと、（誰も炭をつが

なくなり)火桶の火も灰がちになって(人の緊張感も失われており)好ましくない。

四、三、解釈

【現代語訳】

冬は早朝(である)。(冬の早朝)雪が降っているときは、(私が)言うべきことでもない。(同じく)霜がとても白いときも(言うべきことでもない)。また、そんな日でなくても、とても寒い朝に、火を急いでおこして、炭をもって(配って)まわるのも、冬の朝にとてもびつたりである。昼になって、だんだんぬるく空気がゆるんでいくと、火桶の火も灰だらけになっているという具合に、好ましくない。

【論説としての解釈】

冬は早朝である。雪が降っている朝は、もとより美しいので、私が論ずるべきことではない。霜がとても白く下りているのも、同じく、言うまでもない。しかし、このような特別な冬の朝でなくても、とても寒い早朝に、暖をとるために火を急いでおこして、炭をもって、宮中に配給してまわる、など人々が慌しく立ち働いている緊張感は、冬のはりつめた寒気にとてもよく合っている。この自然と人間が調和した緊張感が、冬の美であると思う。昼になるに従って、空気がだんだんと暖かくやわらかくなってゆくと、朝用意した火桶の火も、もう誰も炭をつがず放置されているから、白い灰ばかりになってくる。寒いのは嫌だし、だからみんな慌てて火を用意したのだけれど、暖かくなつたところを見ると、もうあまり好ましくはない。これによって証明されるように、冬的美というものは、冬の風物だけでなく、また人間の営みだけでなく、意外にも、寒さと緊張感との調和が、まさに冬的美

だったのである。

【解説】

末尾の連は逐語的に訳すと、尻切れ蜻蛉である。ただし、記述内容の価値を主題に照らして考えると、季節の美・自然の美というものは、人間の営み・人間の感覚と調和することで生ずることを結論として導き出しており、この章段の結びとなる。第二連で示唆された人為の自然に対する優先と、第三連で示唆される自然の人為に対する優先は、相反する概念であるが、第四連において、自然と人為の調和という結論に統合されるのである。

潜在する論理

『枕草子』第一段は、「季節の美」をテーマとする論説であることが、以上の解釈によって明かになった。「季節の美」が成立する要因を、自然と人為の二項対立の観点から論じたものである。各連をこの観点からまとめると、次のようになる。

第一連：季節の美の成立は、自然に起因することを暗示する。

しかし、そこに人為が介在する可能性を提示する。

そのため、焦点を美の頂点ではなく、開始点に設定する。

第二連：季節の美の成立が、人為に依存する場合を提示する。

自然的要素をいかに置き換えても、これが成立することで証明する。

第三連：季節の美の成立に、人為の及ばない場合を提示する。

自然的要素をいかに置き換えても、これが成立することで証明する。

第四連：季節の美の成立が、人為と自然の調和によることを提示する。

両者がなければ美が成り立たないことで、背理的に証明する。

このように、第一段は典型的な起承転結の論となっていることがわかる。季節の美をきわめるべく個々の風物がさまざまに論じられるように見えたが、それは表層であって、全体をまとめる「論理」がこのように潜在しているのである。これは、この文章に記録された言語表現から導き出したものであり、記録されないけれども存在する情報である。暗示的ではあるものの、一貫した論理が形成されており、確かに千年もの間「名文」と賞されるに値する美しい構造をもつ。

この論理を前提として、文章を振り返ろう。季節の風物は清少納言の論にとつて、「用例」にすぎないということになる。「春はあけぼの」など各連の第一文は、少納言の指定としたが、本質的に、検証すべき「命題」ととらえるべきである。ならば、「をかし」も「なり」も付加されないのが当然である。

なお、清少納言の主張がどこにあるかと言えば、美に人為が介在するということであろう。もちろん、それは自然美を凌駕する性質ではないが、自然に調和する人為に美を見いだそうとする意図を読み取れるであろう。

おわりに

以上、機械的手続きによって、積み上げた結果、導き出したこの章段の解釈は、通説とかなり異なるものとなった。これが正しいか否か、さ

らに検証の要はあるが、この文章が内包している情報自体は引き出しえたと考える。

そして、このような論理があると設定すると、この第一段の意図不明な点がいくつも解決することになる。例えば、意図不明な「をかし」の出現箇所、散見される意図不明な矮小化のことは、短文なのに目立つ「言ふべきに（も）あらず」第二連の一見乱雑な列挙、意味不明の「雨など」、第三連の「さへ」、第四連の一見なげやりな内容……。これらは、彼私の文脈共有度の低さゆえ、不明になってきた事柄である。特に、文法体系の大きな変化は、細部の理解を低下させ、細部に論理を潜ませる平安和文語の理解を阻む結果となっており、突破口がなければ永遠に理解されない言語形式となる。

【現代語訳】を総合すれば、表面的な清少納言の鋭敏な感受性の一端を鑑賞できると思う。しかし、各文の意味の解析の結果浮かび上がったきた論理の方が、重要であろう。綿密な計算によって、過不足なく組み上げた文章でなければ、このように一貫した論理は、成立しえない。四季の頃おいを鑑賞した文章が、偶然美を論じた論説として一貫していたというのは、ありえそうもない。清少納言は季節の美の価値を論考した結果、説得力をもたせる様式を選択し、ことばを選んでこの文章を組み上げたのである。

明示的に論理を形成するアイテムに乏しい和文体を採用しながら、情報と情報の関連性を利用して論理とし、具体的な事物を用いながら、「美」「自然」「人為」といった抽象概念を取り扱っている点、きわめてレベルの高い言語技術をもつものと評価できるであろう。

【注】

- (1) 中学校国語教科書『現代の国語』2(三省堂)平成17年度版の左注を用いて私に作成。松尾聰・永井和子(一九九七)を出典とする。
- (2) 「書く」行為は、情報を言語に置換し、言語を文字に置換することで成立する。ただし、人間は情報のすべてを言語化できないし、言語のすべてを文字化できない。二つの段階のどちらでも、情報の逸脱と情報量の低下が生ずる。「読む」行為は、逆順に文字を言語化し、言語を情報化して、再構成される。書き手と読み手の文脈共有度が高いと、適切に欠落した情報が補充され、もとの情報が復元される。文脈共有度が低いと、これが十全になされず、無理解・誤解が生ずる。平安貴族と現代のわれわれは言いつまでもなく後者の関係である。
- (3) 人は、自分のもつ情報と、すでに与えられている情報をもとに、新しい情報を理解する。自分がもたない情報を根拠にしたり、まだ与えられていない未知の情報をもとに、新しい情報を理解することはできない。これを解読の規則として明示したもの。
- (4) 「春はあけぼのをかし」としても、文法的に非文ではない。現代語でも「象は鼻が長い」という二重主語文は可能である。この文は「象」という主題を、「鼻が長い」と属性を説明しているので、「象は鼻だ」という特徴を取りたてる文と、文法的な意味を異にする。
- (5) 「主語」の実質は、文のタイプによって異なる。動詞述語文の場合は、動作を行う主体・変化する主体であり、「能格・主格」に相当する。名詞述語文の場合は説明する述語に対して「主題」となる。
- (6) 現代語でも、「今日はずいぶん降りますね」のように使つが、「雨が」がない方がむしろ自然である。天気は自他に共有される情報の第一である。
- (7) 渡辺実(一九九一)3頁・脚注一。
- (8) 渡辺実(一九九一)3頁・脚注五。
- (9) 平安貴族の気象に関する知識には、論ずる用意が十分でない。ここでは仮説として提示する。
- (10) 「xデアルコト」も「雨など」の属性としての可能性はある。ただし、その場合集合を形成する類概念があまりない。
- (11) 萩谷朴(一九八一)は、文と文を切るが、「蛍の多く飛びちがひたる」と、ただ一つ・二つなど、ほのかにうち光りて行くも」が平行的し

て「をかし」にかかるとする。ただし、一度文が切れているのに、後の文の述語にかかるとは不自然である。それには、部分が述語省略であり、後から補充すべきものという前提が必要である。本稿では逆に考えている。

- (12) 萩谷朴(一九九一)に、この一文について論考があるが、ここでは文法的な可能性でのみ解釈する。

- (13) 単に「白い」という属性をとりたてる可能性もあるが、「雨など」と同様の概念形成とする。直前に「白き」とあるので、そのものならば直接的すぎると判断する。

【参考文献】

- 柿谷雄三・山本和明(一九九九)『富岡家旧蔵 能因本枕草子』和泉書院
 杉山重行(一九九九)『三卷本枕草子集成』笠間書院
 松尾 聰・永井和子(一九九七)『枕草子 新編日本古典文学全集18』小学館
 渡辺 実(一九九一)『枕草子 新日本古典文学大系25』岩波書店
 萩谷 朴(一九九一)『枕草子 新日本古典文学大系25』岩波書店
 根来 司(一九九一)『新校本枕草子』笠間書院
 速水博司(一九九〇)『塚本枕草子評釈』有朋堂
 松尾 聰・永井和子(一九八四)『枕草子 日本古典文学全集11』小学館
 萩谷 朴(一九八一)『枕草子環解 一』同朋社出版
 萩谷 朴(一九七七)『枕草子 上 新潮日本古典集成』新潮社
 池田龜鑑(一九七七)『全講枕草子』至文堂
 田中重太郎(一九七二)『枕冊子全注釈 一』角川書店
 池田龜鑑・岸上慎二(一九五八)『枕草子』枕草子 紫式部日記 日本古典文学大系19 岩波書店
 松平 静(一九二八)『枕草紙詳解』有宏社
 武藤元信(一九一一)『清少納言枕草紙通釈 上』有朋堂書店
 北村季吟・鈴木弘恭(一九九三)『訂正増補枕草子春曙抄』東京書林
 なお、用例の検索には国文学研究資料館ホームページ(<http://www.nijiac.jp>)電子資料館の日本古典文学本文データベースを利用した。